在京白堊會報

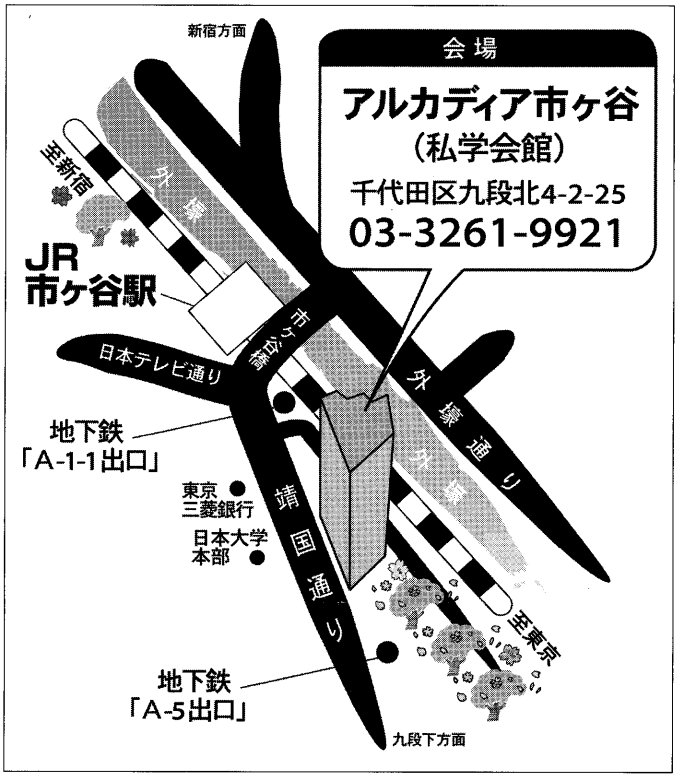
第16号
平成16年3月27日
発行
在京白堊会
〒101-0025 東京都千代田区
神田佐久間町1-11
産報佐久間ビル
産報出版（株）内
TEL&FAX（03）3254-9301
http://www.hakua.sokei.co.jp/index.htm

在京白堊會 創立35周年記念総会

5月8日㊏アルカディア市ヶ谷で開催

～参加者に「在京白堊會創立35周年記念誌」を配布～

日時：5月8日（土）午後4時～
場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）
会費：一〇，〇〇〇円（年会費二，〇〇〇円を含む）
学生・院生　三，〇〇〇円（同右）



在京白堊会が発足して、今年は35周年。あの熱狂の甲子園大会を期して誕生したそうですが幹事年次の我々47年卒は、その興奮を遠まわしに眺めるしかなかった、遅れて来た世代です。

しかし、そのせいで熱く切ない渇望を宿したままに、はや卒業32年を迎えました。

35周年という記念すべき在京白堊会総会の幹事年は巡り合わせか？神の思し召しか？ならば熾き火のようなエネルギーをこの場で一気に開放しよう！

「幹事年は爆発だ！」の勢いで、会員の皆様が笑って、語らって、ストレスを発散して、そして記憶に残るような総会にしたいと頭をひねってきました。

第一部では、47年卒の小松正之君が「鯨と日本の文化の深いかかわり」を熱弁してくれます。彼は国際会議の怒号のなかで、「Let me speak!」と叫んだ猛者。どんな疑問・質問にも、たちどころに答えてくれるでしょう。

第二部の会場では岩手放送が制作した「白堊校20世紀の軌跡」と、在校生がNHK（教育）放送の第50回全国放送コンテストで準優勝に輝いた「新入生の7週間」を放映予定です。

伝統に彩られた一高の歴史と現在進行形の一高生の息づかい――時を越えた二つの映像が皆様を懐かしの青春時代にプレイバックさせます。そして、ハイライトは……当日のお楽しみ。

今回も皆様が集いやすいように土曜日に開催します。年に一度の総会で、懐かしい校友の方々と親交をあたためあいましょう。ふるってのご参加を心からお待ちしています。

なお、出欠は35周年記念誌の準備がありますので、遅くても4月28日迄に同封のハガキにてお知らせください。（47年卒）

昨年の総会風景

35周年記念講演会 講師とテーマのご紹介

〈テーマ〉『日本の食文化と鯨』
〈講　師〉小松正之（47卒）
（第54回IWC下関総会日本代表団）

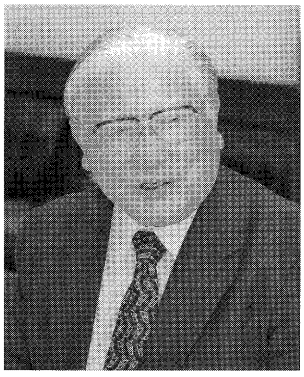
1977年農水省入省後、エール大学院留学、在イタリア日本大使館勤務を経て1985年、日米漁業交渉等を担当する。1991年よりIWC（国際捕鯨委員会）会議に出席、日本をはじめ北欧や海に依存する世界の沿岸国など商業捕鯨の再開を模索する国々の理論的、行動的リーダーである。現在水産庁漁場資源課長、歯に衣きせぬ明解な言いまわしは説得力があり聴く者の共感を誘う。

お願い

総会欠席の方は、同封の振替用紙で会費二，〇〇〇円を振込み願います。会費納入の方には「在京白堊会35周年記念誌」を送付します。

創立35周年を迎えて

在京白堊会会長　及川昭伍（昭和25年卒）

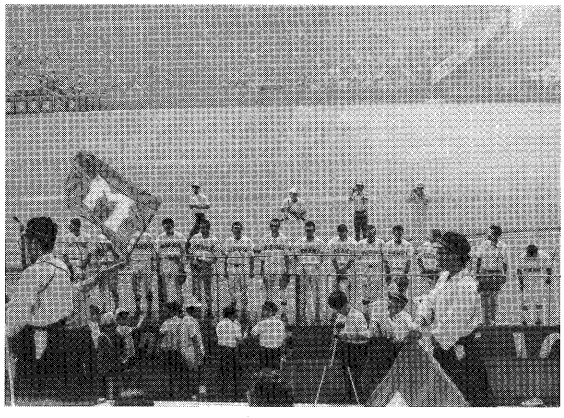


在京白堊会は本年（平成16年5月）創立35周年となります。創立時の中核メンバーであった多くの先輩方が既に他界されました。創立以来23年間事務局を担当し、世話人代表をつとめられた工藤祐正弁護士（昭17卒）も他界されてから12年になります。35周年を迎えるにあたり、先輩諸氏のご功績を思い起こし、深く感謝するとともに、心からご冥福を祈ります。

在京白堊会は、昭和44年5月13日に上野精養軒で創立総会を開催しました。前年の昭和43年の夏、甲子園の第50回全国高校野球大会にわが盛岡一高が出場して、ベストエイトまで駒を進めました。母校の弊衣破帽の応援団がテレビの名物となり、勝利のたびに軍艦マーチの校歌が甲子園から全国に流れました。その感激を契機としてこの会は創立されました。創立総会への出席者は100名、当時の会員数は約600名でした。

当会は、会員の親睦のみを目的として、会長も置かずに20年以上運営してきました。総会は、毎年、母校の創立記念日である5月13日に開催することとし、当初の13年間（昭和44年～56年）は上野精養軒で、その後の16年間（昭和57年～平成9年）は東郷記念館で開催しました。いずれも白堊会の同窓が役員や宮司をしているというご縁でした。次第に参加者数も多くなり、会場の収容能力の関係もあり、最近は私学会館で開催しています。第14回の総会から、満50歳となる年次が順次1年送りで幹事を担当する慣行が確立し、毎年、担当年次のユニークな企画で楽しい総会が開かれてきました。会員数も順調に拡大して、創立時の5倍の3000人を超えるようになり、総会参加者も毎回250人程度になりました。新規参入の若手会員の多くから、会運営の改革の要望が出され、平成8年の総会で在京白堊会規約が改正されて現在の責任執行体制（会長、副会長、常任幹事、事務局長）が作られました。その後、年2回の会報の発行（平成8年11月創刊）、インターネットホームページの開設（平成12年10月）など、会員相互の情報交流の充実が進むとともに、財務の健全化も図られてきました。関係者のご努力と会員のご協力に深く感謝します。

私達は白堊校舎で青春を過ごし、秀峰岩手山を毎日仰ぎ、清流北上川に悠久を思い、浩然の大気の中で忠実自彊の心を共に学んできました。長い歴史と伝統に培われた白堊の心を次世代につないでいくために、在京白堊会が今後とも相応の役割を果たすことを心から期待します。



在京白堊会発足の契機となった昭和44年の母校甲子園出場。「在京白堊会35周年記念誌」には発足当時の事情もまとめている（写真提供、S44年卒、佐々木裕文さん＝甲子園出場当時の応援団長）

当初の13年間は上野精養軒で開催された。写真は昭和53年（1978）5月13日開催の第10回総会。167名が参加した（写真提供、S18年卒八重畑達雄さん）

●書評

『盛岡中学生宮沢賢治』（河出書房新社）

小川達雄（昭和22年卒）著

在京白堊会幹事でもある昭和22卒の小川達雄さんが、つい先週河出書房新社から上梓された『盛岡中学生宮沢賢治』がおもしろかった。

題名の通り盛中時代の賢治に焦点をあてた本で、実証主義というのだろうか、膨大な文献にあたりながら空白の部分といわれる中学時代の賢治を掘り起こして、その原型を浮き彫りにしている。

引用が多いととかく物語性に欠けるものだが、本書はその実証主義が臨場感を生んで、読者を賢治の時代に一気に誘う。

たとえば、冒頭の盛中受験で花巻から盛岡に向かったくだりなど、明治42年3月31日の乗った汽車が花巻発午後1時30分、盛岡着2時24分で、快晴のその日、その列車から盛岡駅に降りた人々はせいぜい30人ほど。その朝はマイナス7度とひどく寒かったとある。何やら吐く息が白く見えてくる感覚に包まれる。

物語は、賢治が在学中に詠んだ歌と詩を順に検証するかたちで展開されているが、終章で扱われている次の詩には泣かされた。

はだしにて
よるの線路をはせきたり
汽車に行き逢えり
その窓明し

本書によると、賢治は卒業間際体調を崩し、そのまま卒業後ついに入院、進路も定まらないまま岩手病院で悶々としていた。その病棟でどうやら賢治は看護婦さんに恋をしたらしい。

日詰から通っていたというその看護婦さんへの想いは、退院後も衰えることはなく、花巻にあって上記の詩が詠まれたということである。

あの賢治が、裸足で駆けたというその激しさに感動しながら、四六判336ページの本書を一気に読み終えたものである。

●トピックス

及川昭伍氏をゲストに迎え「二火会」のオープン開催成功！

昭和41年卒の同窓生が異業種交流的勉強会として開催している二火会。

原則として隔月第2火曜日に開かれていて、メンバー自身が持ち回りで講師を務め、自分の仕事のこと、趣味のことなどをそれぞれにレクチャーを行うというやり方で続けてきており、これまでの開催は8年で通算40回を数えている。

ある時は東大教授がバイオテクノロジーについて解説すれば、ある時は保険会社の者が賢い保険の掛け方を手ほどきする、アメリカ在住の女性地球物理学者が来日ついでに地震研究の最先端をレクチャーすれば、歯科医師が歯周病の怖さをアピールし、ついでに参加者全員の検診をしてくれる、そんな多彩な内容である。

毎回の参加者は15名程度で、常連も少なくない。弁当にビールとつまみがついて会費は2千円。雰囲気はきわめて気安く、テーマも幅広いし、会費の安さも続いている秘訣か。

そんな折、2月10日開催の例会は、在京白堊会会長及川昭伍氏（昭和25年卒、国民生活センター顧問）をゲストスピーカーに迎え、出席も二火会メンバーに限定しないオープン開催として行われた。

及川氏は、「儲かる企業・儲からない企業」をテーマに講演され、経済企画庁総合計画局長、国民生活センター理事長等を歴任した約50年にわたる経験をもとに話される内容は、一流の日本経済論となっていた。素人にもわかるやさしい解説で、出席者に多大な感銘を与えた。

同窓の仲間内の気安さから、エピソードが具体的で、現在の経済政策への苦言も混じって、1時間の講演がアッという間に過ぎてしまう充実ぶりだった。

なお、今回はオープン開催ということで、41年卒のメンバー以外にも、36年卒から50年卒まで幅広い参加があった。

大盛況だった二火会オープン。
（円内は講演中の及川会長）

大好評の「第1回在京白堊回ゴルフ大会」
―恒例行事化へ―

栄えある第1回優勝は「団体」43年卒チーム
「個人」玉田剛嗣さん（昭30年卒）

団体優勝の43年チーム（左から川村正明さん、戸田敬さん＝岩手より参戦＝、玉澤健児さん、佐々　伸さん

第1回在京白堊会ゴルフ大会が平成15年11月21日、茨城県竜ヶ崎市のザ・ゴルフクラブ竜ヶ崎で盛大に開催されました。

このゴルフ大会は、会員の親睦と交流拡大に向けて会員からかねて要望の強かったイベントが実現したものです。

大会には、29年卒から30年、31年、34年、37年、40年、41年、42年、43年、47年、50年卒まで幅広い年次から総勢35名（うち女子2名）が参加、快晴無風の絶好のコンディションのもと、プレーを楽しみました。

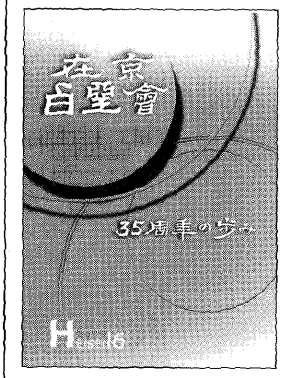
プレーの結果は、混成チームを含め10チームが参加した年次対抗による団体戦の部では、43年卒（玉澤・戸田・佐々・川村）チームが栄えある第1回大会の栄冠を獲得しました。

2位30年卒（杉渕・玉田・佐藤・松本）、3位29年卒（伊藤・高松・宮台・興津）と続きました。

個人の部では、30年卒の玉田剛嗣氏が優勝、記念すべき第1回大会チャンピオンとなりました。優勝者には純銀製の優勝カップ及川杯（及川昭伍在京白堊会会長寄贈＝持ち回り）が贈られました。2位青山洋三氏（37年卒）、3位戸田敬氏（43年卒）でした。

なお、このゴルフ大会は、好評により、今後とも継続し毎年同時期に開催する運びとなっています。

表彰式パーティーでは、参加者一同、1年後の再会を誓いあった



「在京白堊35周年記念誌」
（B5判並製・200頁超）
5月初旬完成！

総会参加者に会場で配布

総会に参加できなかった会費納入者には後日郵送いたします

副会長の大平洋司編集委員長を中心に編集委員会が重ねられ200名近くの会員から投稿が寄せられ、在京白堊会の歴史と現況が一望できる充実した内容になった

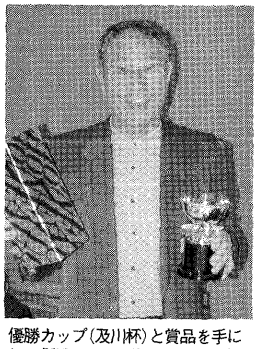
「在京白堊会35周年記念誌」は編集委員長の大平洋司副会長（26年卒）を中心に、各年次幹事等のご協力を得て、200名近くの会員からエッセイや近況をお寄せいただくことができました。いま、総会当日の配布を目指して、鋭意作業中です。

B5判上製本（週刊誌大のムック本タイプ）で、モノクロですが写真もふんだんに入った充実した内容の記念誌です。どうぞご期待ください。

この記念誌は、総会当日に配布のほか、総会に出席できなかった会員で会費を納入された会員には、後日郵送いたします。

「土人踊り」第1回への異論

前回第15号の特別座談会「創始者が語る猛者踊り（土人踊り）」の事実関係について、初代首長・田村喜八氏の同級生で友人の小川達雄氏＝第3面書評欄参照＝から、第1回「土人踊り」は昭和23年ではなく**昭和22年5月13日であった**というご指摘をいただきました。


優勝カップ（及川杯）と賞品を手に個人優勝の玉田剛嗣さん（30年卒）

編集後記

この半年はゴルフ大会、記念誌発行とビッグプロジェクトが続き、多くの先輩後輩とのやりとりを通じて交流が広まり、深まりました。手紙に添えられた励ましの一筆、メールに添えられたあたたかいコメントに、ずいぶん力づけられました。同窓会のあたたかな絆を、あらためて感じています。年1回の総会ばかりではなく、交流できる場をできるだけたくさん広げていければと考えております。